

ウィーンに暮らして 21期 多田将宏

私が2年半暮らしたオーストリアの首都ウィーンは、モーツァルトイヤーにあたる昨年、音楽の都として全世界から注目を集め、多くの観光客が訪れ、街は活況を呈していたようである。またEU統合後の好景気の中、長く中世のまま変わる事の無かったこの街の表情にも、近年良きにつけ悪きにつけ、少し変化が現れているように感じる。

1998年から2000年まで私はウィーンに滞在した。大学を卒業後建設会社に7年勤めた後、声楽家である妻との結婚を機に、かねてからの夢であったヨーロッパ留学に踏み切った訳である。といてもそれ以前から周到な準備をしていた訳でもなく、特にドイツ語はほとんどゼロの状態の旅立つことになった。あまり深く考えず「なんとかかなるだろう!」と思っていたが、現地では実際かなり苦戦した。勤めていた会社には、無理ならば退職しようとして一大決心で相談したところ、当時の社長が理解を示してくれ、会社に籍を残したまま退職して行くことが出来た。まだバブルがはじけたとはいえ、会社にも人の心にも余裕のある時だったのかもしれない。

さて私たちはウィーンに着いてから、交通の便のいい西駅の近くに、大家さんの奥さんが日本人という事もあり、恐らく築100年以上の石造りのヴォーヌング(アパートの一室)を借り、生活を整える事にした。時には20年程度で取り壊されることもある日本の集合住宅に比べ、内装と設備を取り替えながら、代々



自宅アパート(当時)

受け継いで住まれている事に感心したものである。実際これらの住居はそれに耐えうるだけの性能を持ち合わせている。1mはあろうかという分厚い外壁は十分な断熱性能を持ち、冬の厳しい寒さ、夏の強い日差しから室内を守る。

その外壁の外と内に付けられた窓は、空気層が断熱の役目を果たし、縦長の形状は開放時に重力換気を可能とする。建築の教科書で習ったような事であるが、実際に暮らしてみないとその居住性は体感できない。今日本で議論を呼んでいる外断熱と内断熱のどちらがいいかというような問題も、実はこのあたりの断熱に対する文化の違いにあるのではないだろうか。

それから4ヶ月間ドイツ語を語学学校で学び、いよいよ大学の入試に臨む事になった。通常の総合大学への留学であれば、入学試験は受ける必要が無く、手続きだけで済む。ところが、私の希望していたウィーン応用美術大学は、マイスタークラス制度を採用しており、基本的には卒業するまで同じ建築家の下、少数で修行していく。そのため、独自の入学試験を実施しているのである。受験しようとしていた建築家、ハンス・ホライン



シュテファン教会(昨年)

研究室の試験も大変ユニークなものだった。まず初日の朝一番に1枚の問題用紙が配られた。そこには「(何も見ず)思い出して描きなさい」とあり、タージ・マハールやビルバオ/グッゲンハイム美術館・・・と列記されているだけであった。皆最初は戸惑っていたが、とにかく何かを描いて提出しなければならない。必死で思い出して描いた。スケッチを持ち帰り、後から本物の写真と見比べた時には苦笑した。その後「アルヴァ・アールトについて書け」と、再び「(何も見ず)思い出して描きなさい」、「将来の建築家像(職能)について書け」という問題が続き午前の部が終了。午後からは街に出て「市庁舎周辺の建物のスケッチ」。再び学校に戻り、「リオのカーニバルに出走する台車のデザイン」でやっと入試第1日目終了した。2日目は、1日課題「ツーリスト・インフォメーション」の設計で、朝からウィーン市内の計画地を見に行つたあと、図面、模型を必死で制作した。時間いっぱいになり作品を提出して、やっと滞り無く入試日程を終えた。まったく何とも濃密な2日間で本当に疲れた。と同時にとても楽しい入学試験だったとも言える。少なくとも私は楽しんだ。日



入試1日課題

本でも、画一的な学力試験以外にこのような試験があっても良いのではないだろうか? (※詳細についてはHP参照)

<http://www.geocities.jp/masakunst/>

ところでホラインについてであるが、一言で表現すると良くも悪くも「ひどい人」であった。彼も類に漏れず多忙な建築家で実際には月に1〜2回しか現れないのだが、ちょっと登場の仕方が特殊であった。彼が来る事は研究室の掲示板で当日の朝いきなり知らされる。それからが大変で、みんな自分の場所を確保し、壁に図面を貼り机の上に模型を展示してプレゼンテーションの準備をする。その日1日は戦争のようである。ホラインが来るのはいつも夜である。しかし予告の6時を過ぎても一向に現れない。皆、当然のようにして待っている。9時になってようやくひょっこり現れ、一人ずつ順番に講評が行われる。最後の人が終わるのはすっかり真夜中である、というような調子である。だから学生は学校には毎日来ていなくてはならないし、日々準備もおかなくてはならない。ホラインはまだ現在ウィーンで精力的に設計活動をしているが、大学の教壇からは私たちの年で退き、今はザハ・ハディドが後を引き継いでいる。



ホライン研究室(当時)

昨年、およそ4年半ぶりにウィーンを訪れた。冒頭にも述べたが、現在ウィーンは私たちが暮らした時には考えられなかつ

たほどの好景気の中にある。
円・ユーロのレートも当時のおよそ倍になっており、旅行するには少し辛かったが、いくつかの新しいウィーンを見る事が出来た。まず街の至る所で、建設用のクレーンが古都のスカイラインに突き出している。長い間活躍の場が無



ベルヴェデーレ宮中庭 (昨年)

※建築現場のクレーン

かった建築家にもやっと出番が回ってきたようである。中世の歴史的建造物の皮膜は法律によりきつく保護されているが、その建物の隙間から、あちらこちら新しいデザインが顔を覗かしている。また最近ではガラスを皮膜の外に設置して外壁とし、カフェのテラス席等とする手法が流行っているようである。郊外では若手の建築家を起用した新築のプロジェクト等があり、その中でも今回、ワインを試飲させ販売するワイナリーが興味深かった。(※詳細についてはHP 参照)



オーストリアのワイナリー

さて、私は昨年いっばいで勤めていた建設会社を退職し、設計事務所として独立する事になった。長い間の不況とリストラで、日本の建設業界は傷つき疲れきった状態で、大変厳しい中での船出となる。

それでも最近は少し新しい風が吹いてきたようにも感じており、なんとかその風を捉まえたいと思う。ウィーンから帰国後思ったのは、「なんとこの国はアーキテクトの多い国なんだろう！」という事であった。日本のバブル経済は私も含め多くの建設技術者を産み出した。そして近年はテレビ、雑誌で建築家の存在がクローズアップされ、モダンデザインが流行として恐ろしい速さで消費されてきた。そんな中でもとすると私たちは建築家の職能を見失ってしまう場面が数多くある。しかし私には日々、目の前にある仕事の中で建物を造り続けるしかない。以前は雲の上の人と思っていたヨーロッパのスター建築家も、向き合っている仕事の問題点は私たちとさほど変わらない。

ホラインと初めて面談した時、にやっとして「Warum Wien?」と質問された。渡欧前も後も、日本でいろんな人達からやはり「何故ウィーン？」と聞かれた。私も留学の成果をなんとか役に立てたいなどと、ずっと気負ってきたのだが、もはや単純にヨーロッパのものを日本にコピーして賞賛されるような時代ではない。むしろ現在は西洋が日本の方を向いている。私にとってウィーンは、日本と世界を繋ぐ物差しであり、これからも自分の位置を見失わないように確認する指標にしていきたいと思っている。そしてまたこの街は、いつ帰ってもまるで昨日まで暮らしていたかのように思える、私の第二の故郷である。